

# 近代日本というマクベス

小 谷 野 敦

拙稿『オセロウ』と『行人』の「出遭い」(『比較文学』32号)の最後の註で、『行人』と『マクベス』の対比研究を予告しておいた。本稿はそれにあたるので、シェイクスピア「漱石間」に私が探ろうとしているのが単なる影響関係ではないこと等、基本的な姿勢についてはそちらを参照されたい。

1

さて、その最後の註から説き起さそう。『行人』は、プロット上、『オセロウ』とのかんりの類似が認められるが、『マクベス』については一見した所それはない。但し、ひとつ注意を惹くのは、註に記した通り、一郎が小説の後半で見せる不安神経症の中に、不眠、という症候があり、これが「眠りを殺した」マクベスのそれと対応している点である。そして

うひとつは、極めて些細なものと見える、「鉢植えの比喩」の用法である。つまり、直が「女の立場」を嘆き、「妾あななんか丁度親の手で植付けられた鉢植のやうなもの」だと言ひ、これを聞いた二郎が「女性の強さ」を感じる所に現れたこの比喩は、『マクベス』の第一幕大四場に、一瞬だけ姿を現わす。めざましい働きで反乱軍を平らげたマクベスに最大級の讃辞を贈り、ダンカン王は、「いかなる報酬もそなたの功績にはおよばぬ」と告げ、マクベスが答礼する。そのときダンカンはこう言う。

そなたという苗木を

植えつけたわしだ。りっぱに成長するよう見まもるぞ。

(一幕四場)

このあと、ダンカン王は更にバンクォーにも礼を述べ、次いで息子マルカムをカンブランド公、即ち王位継承者に任ずる。この当時、王位が必ずしも厳格な世襲制でなかったことは、『ハムレット』等を見る際にも頭に入れておかねばならない。つまりマクベスは、彼が『最大級の報酬』に価すると言ったダンカンが二枚舌を用いたと感じるのだ。カンブランド公の地位は、明らかにマクベスが与えられたコーダーよりも上位にある筈だから。むしろダンカン王はマクベスに悪意を抱いているわけでも、彼の不満に気づいたはずもない。しかしここに挿入された〈植え付け〉の比喩は、この〈二枚舌〉と相俟って、所詮は働きに応じて地位を与えられるにすぎないマクベスの従属性を暗示してしまっている。

そしてこの植物の比喩は、いうまでもなく、後半における〈バーナムの森〉が動かぬ限りマクベスは安泰だという魔女の予言に連動してゆく。この予言を聞いてマクベスは歓喜してこう言う。

そんなことは断じてありえぬ。だれがいったい／森を召集できる？だれが大地に張った根を／みずから抜けと樹に命令できる？

(四幕一場)

ここにダンカン王の用いた比喩を適用してみれば、植物とし

ての地位に甘んじることができず、自らその根を引き抜いて王の地位を得た者としてマクベスがいるわけで、マクベスの思考が自分の行為を否定するものとなってしまっているのがわかる。

さて『行人』の、〈鉢植え〉と〈不眠〉がどのような関係にあるかは、『マクベス』そのものの分析を通してこそ鮮明になるものと思われるので、ひとまず『行人』を措いて『マクベス』の構造を分析してみよう。いま述べたマクベス及びバーナムの森に共通する〈受動的に在らしめられているものが、これを否定して能動的に動き始める〉というモチーフは、実はこの劇全体を貫くものである。まず、バーナムの森と並ぶ魔女の予言〈女の腹から生まれた者にマクベスは倒せない〉にしても、月満ちる前に母の腹を蹴破って生誕したというマクダフが現れてマクベスの期倒を裏切るわけだが、彼とて、母の腹から出てきたことに変わりはない。ここで問題になっているのはそのことではなく、日本語でも英語でもひとしく受動態で表現される〈産まれる〉という。その受動性を、彼が否定したことにある。

さて、ではマクベス夫人はどうだろうか。登場の最初から彼女が冀っているのは〈女でなくなる〉ことであり、これは第一義的には、女らしい優しさを 抛げ捨て、可愛い赤子の頭を叩き潰す程の残忍さをもってダンカン王を弑逆すること

ではあるが、もうひとつ、余りに明白な、社会内に於ける女の特性を、彼女は躍起になって否定しようとしている。即ち

偉大なる地位をとものにわかちもつべきおまえ (一幕五場)

であるマクベス夫人は、マクベスがグラームズ、コーダーの地位を国王から与えられるにつれ、グラームズ夫人、コーダー夫人の地位を夫から与えられる。つまり彼女は二重に受動的な存在なのである。しかしここで、この、ダンカン↓マクベス↓夫人という流れを逆流させようと彼女は目論む。即ち、

あなたの耳に私の強い心を注いであげる (一幕五場)

ことによって。そしてマクベスもマクベス夫人も、冒頭から露わになった彼らの〈受動性〉を拒否するため行動を起こす。恐らくマクベスの不満は、与えられた地位の低さではなく、その〈受動的〉な与えられ方にあったのではないか。

〈受動性〉を巡って『マクベス』という劇はくっきりとしたシンメトリーを形成している。この夫婦が、彼らの〈地位〉即ち後天的な性質における受動性を否定するのに対し、後半に現れる二つの存在、バーナムの森とマクダフは、それらの

根本的な、植物性、及び八生まれるVという受動性を否定するのだ。つまり、表層の受動性を拒否した二人は、深層でこれを拒否した二つのものに敗れ去る。

バーナムの森もマクダフもしかし、結局はこの闘争に於ける最終的勝利者ではない。それは舞台上ではマルカム、舞台の外でフリーアンスなのである。マクベスは言う。「言葉は行為の熱をさますあまりにも冷たい息にすぎぬ」(一幕一場)と、実の所伝統的な演劇にあっては言葉こそが重要な行為(アクション)であるために、マクベスのこの二項対立は奇妙な矛盾を生む。例えばマクベス—マルカムの二人を、ハムレット—フォートインbrasに比してみれば、行動的に振舞うのはマクベスとフォートインbrasであり、ハムレットは行動を忌避しているように見える。しかし無論ハムレットは、第四場でフォートインbrasの進軍を目のあたりにして、直ちに行動に移れぬ自らを恥じる。このときのハムレットは、今掲げたマクベスの科白を口にしてもおかしくはないし、独白の中でも彼は一貫して、行動を妨げるものとしての思索を侮蔑し続ける。しかし、マクベスとハムレットはともに、言葉もまた十分行為でありうるということを忘れ、言葉と行為という二分法に陥っている。「言葉は……」というディスクールが既にメタ言語であることはいうまでもない。メタ言語を形成せずにいられぬマクベスは、言語の力を認識し損っている。

事実、ダンカン王を殺す、という肉体的行為に彼の関心は集中してしまっていて、その後王位を篡奪したあと、如何に他の武将たちを統御していくか、彼は殆ど顧慮していない。たしかに王の血をお付きの者の剣に塗りつけて完全犯罪をもくろんでいるかに見えながら、夫妻にとつてこの計画はさして重要でないように思えるし、本当に他の諸將を欺きおおせるとも考えていないようである。彼らの犯罪だとばれてしまった。と夫婦が認識して慌てるどころか、いつそのことに気づいたかさえわからない。もはや彼らにとつて、自分が次に何をするか、しか問題ではない。それが受動性を拒否した者の宿命である。

これに対するにマルカムがいる。彼は印象が薄く、活躍するのはただ四幕でマクダフの忠誠を試す長い部分のみだ。マルカムは、自分が王にふさわしくない、ありとあらゆる悪徳を備えた男、マクベス以上の悪党であると、真情こめて語る。これを真に受け、スコットランドの未来に絶望したマクダフが彼のもとを去ろうとしたとき、初めてマルカムは今のが全て嘘であると告げ、自分が極めて廉潔な男であり、その嘆きぶりによってマクダフの忠誠は確かめえたという。実に胡散臭い場面である。自分の悪徳を自ら告白するのも奇妙なら、いったん嘘をついた人間が二度目に口にするのが真実であるとする保証などどこにもない。ここで用いられているのは極め

て切れ味の悪い言葉であり、恐らくハムレットもマクベスもこうした「行為」としての言葉を口にしないだろう。彼らは確かに、狂気を装い王の死を嘆き悲しみ、他人を欺むこうとしているかに見えるが、何しろ自分自身言葉の伝達作用——胡散臭い側面——を信じていないので、喋るそばから「嘘だよ、嘘だよ」と囁いているような格好になってしまふ。『シエクスピア史劇』で、E.M.W.ティリヤードは、マルカムを的確に評している。「彼自身は殆ど興味を惹かない人物であり、むしろ彼が表現しているものこそ大きな興味の対象である。：：彼は：：：あらゆる個人的喜びと同時に個人的魅力を犠牲にして顧みない理想的な統治者なのである。」(3)メイナード・マックは『王殺し』で、これに付け加えている。「理想的な人間ではないわけだ！」(4)マックの評はまさに人間中心主義的、ロマン主義的な、シニフィアンとシニフィエの一致を要求する観点に立つものである。マルカムの言動が本当にマクダフを翻弄しえたかどうか怪しい。マクダフとて、マルカムの芝居に付きあってあげたのかもしれないし、その際、少なくともマルカムは、シニフィエなきシニフィアンを操り、ラカンのいう象徴界に登録された理想的な統治者——生活者であることだけは確認できたのだ。実際に清廉潔白であるかどうかは問題ではない。むしろ逆に、マルカムは言葉——世界に対して自分が無邪気ではないことを証明しえたのである。(5)

マクベスのような神経症患者にとつて、マルカムのように、最後のの真実、つまり最終的シニフィエを明らかにすることなく宙釣りのまま行為しえつつけることはできない。」やうてしまへばすべてやうてしまつたことになるなら」(一幕七場)と云う彼には、時間は線ではなく、ダンカン殺し——バンクオー殺し——マクダフ殺し、といった点を次ぎつきと跳躍してゆく。切斷された点の連続として把えられ、*done1, done2, done3* という形で彼は最後のダンンを求め続ける。のっぺりと広がる時間の中を漂うことができず、ある点の前にあるか通り過ぎたか、それが常に関心の的となる。これが神経症者の世界像である。夏目漱石は、『文学論』序でいう。『英文学の有名な典籍のうち読んでいないものがいくつもある、その「の」の機を利用して一冊も余計に読み終らんとの目的以外には何らの方針も立つる能はざりしなり」(傍点引用者)漱石はまだ、「英文学」を、「全てやうてしまつた」と考へたのである。(7)。「最初の犯罪のあと、マクベスは何かに追ひ立てられるように殺人を重ねる、と誰もが感じる。」L・C・ナイツはそう言う。(8)。「これを端的に象徴しているのは、バンクオー暗殺の刺客二人を放ったあと、駄目を押すように派遣される第三の刺客であ

る。はじめに刺客を派したあとのマクベスは、待つ、立場に立たされる。自ら行為を起こすことがオブセッションとなっている彼にとつて、時の経過が事態を運ぶに任せること、つまり、これ以外の何者かに自分の運命を委ねることは耐えられない。そこから、彼になしうる能動的行為として、刺客を付け加えるという筆に出ざるをえないのだ。しかし、にも拘らず、彼の最大の懸念の種であるフリーアンスの逃亡を防ぐことはできず、このとき第三の刺客は、無意味、になってしまう。ナイツは、マクベスのこつした、無意味な繰り返しを論じて、『ルクリース凌辱』から次の一節を引く。

So that in vent'ring ill we leave to be

The things we are for that which we expect;

And this ambitious foul infirmity,

In having much, torments us with defect

Of that we have: so then we do neglect

The things we have, and, all for want of wit,

Make something nothing by augmenting it.

(II. 148-54.)

夏目漱石がロンドンの下宿で書籍を次から次へと購入し、当然の如く何の安心も得られぬまま狂していったとき、彼は、己

れの持っているものを知らず、己れの持たざる最終的な何ものかを求めるといふ姿勢において、極めてマクベスに近い。彼の伝記的な文章のなかにその痕跡を尋ねあてるのはたやすくろう。しかし、ここでは『行人』から、少し長くなるが、引いておこう。

兄さんは書物を讀んでも、理窟を考へても、飯を食つても、散歩をしても、二六時中何をしても、其處のに安住する事が出来ないのださうです。何をしても、こんな事をしてはゐられないといふ氣分に追ひ掛けられるのださうです。

「自分のしてゐる事が、自分の目的チヤクトになつてゐない程苦しい事はない」と兄さんは云ひます。

「目的でなくつても方便メイシヤクになれば好いぢやないか」と私が云ひます。

「それは結構である。ある目的があればこそ、方便が定められるのだから」と兄さんが答へます。

兄さんの苦しむのは、兄さんが何を何うしても、それが目的にならない許りでなく、方便にもならないと思ふからです。ただ不安なのです。従つて凝としてゐられないのです。兄さんは落ち付いて寐てゐられないから起きると云ひます。起きると、たゞ起きてゐられないから歩くと云ひます。歩くとたゞ歩いてゐられないから走ると云ひます。『既に走け

出した以上、何處迄行つても止まらなないと云ひます。止まらない許はずかなら好いが刻一刻と速力を増して行かなければならないと云ひます。其極端を想像すると恐ろしいと云ひます。冷汗がでるやうに恐ろしいと云ひます。怖くてく堪らないと云ひます。<sup>(10)</sup>

マクベス夫人は「望みはとげても、なんの意味もないわ、心に不安の棘があれば。」という。夫婦はしかし、王位篡奪という目的チヤクトを持っていたはずである。ではかれらの目的は心の平安にあったのだろうか。マクベスをとらえているのは来世における却罰への恐れではない。

この世で、時の浅瀬のこちら側で、万事解決するなら、／＼そうならあの世のことなどだれがかまうものか！。／だがこういうことはつねにこの世で裁きがある、（二幕七場）

彼は徹底して世俗的である。一郎のばあい、友人Hとの対話において、人間としての自分を超越する存在へ向けて思ひを至すことになるが、『門』においてと同様、この思考様式、宗教的な方向への転轍が、シェイクスピアが過たずとらえた、現世における関係の不安を隠蔽する働きを持つことは前稿でも少し触れた。この〈超越者〉問題については後で別のアプ

ローチをすることにして、一郎が「勝てないもの」として意識し、『マクベス』の重要なモティーフである「自然」について検討しよう。

### 3

L.C. ナイツは簡潔にこう言う。「マクベスの罪は反自然であるのみならず、その罪悪は、ある意味で自然に基づくものに敵対するものとして定義されている。」<sup>(11)</sup>「バーナムの森とマクダフはしかし、やはり自然に敵対する形でマクベスを倒している。あたかもマクベスの滅亡は、反自然の同士討ちといった趣を呈する。ナイツに言わせれば、「自然は自らの内からマクベスを排除するために反自然に化す」ということになる。<sup>(12)</sup>つまり、自然が反自然を倒すという形をとらず、徹底的に受動的な、自然そのものであるかの如きフリーアンスが、殆ど、行動」とは無縁に舞台外に放逐されてあることが『マクベス』のユニークさであり、フリーアンスの子孫だといわれる当時の国王ジェームズ一世の「王権」の強固さを保証するものとしての機能なのである。

ウィルソン・ナイトは、「饗宴」と「眠り」が「自然のもたらず創造的な恢復力」を持つと述べる。<sup>(13)</sup>この植物的なイメージは、ある目的へ向けての前進を旨とするマクベスからは奪

われてしまい、ダンカン王殺害の後、彼は饗宴の場に加わることを許されず、眠りを与えられない。不眠症の基本的なメカニズムは、「眠り」という受動的——植物的——自然が、能動的——資源敵対的な、目的意識、によって阻害されることにある。少女を主人公とする小説の中で『赤毛のアン』だったような気もするが覚えている（？）ヒロインが眠れなくなり、眠るために一番良い方法は眠ろうとしないことだ、と言って睡眠に成功するのを読んだことがあるが、不眠症の何より恐しい所は、眠りを妨げるのがまさに「眠ろう」という目的意識であることだ。このヒロインのように素直な精神構造の持主ではない一郎のような人物の場合、事態はそう簡単ではない。仮りに彼が「眠ろうとしない」という方便を用いたとしても、彼にはそれが「眠る」という目的に従属するものであることが常に意識されているのだから、眠りは訪れない。先の引用部分で彼が呈示した、行動を目的と方便に二分してしまう世界観こそ、不眠症のみならず、「眠れない時代」としての近代文明を支えるものなのである。むしろ、普通には、目的でも方便でもない行動というものはあるはずなのに。

「自然」に對置させられるものは、なかなか多様である。一般には文化であろうし、漱石を論じる柄谷行人にあっては、「意識」である。しかし、こうした文脈の中で最も効果的なのは、グレゴリー・ベイツンが掲げた「目的心」であろう。<sup>(14)</sup>べ

イツスンが繰り返し説いてきたのは、我々は孤立した単位ユニットではなく世界が有機的なシステムであること、人間の精神は自らコントロールできるものではなく、意識とは精神の一部に過ぎないこと、人間の文明は、このことを忘れたために危機的な状況に向かって邁進していること、であった。

アダムとイヴは、興奮で酔いしれんばかりでした。ものごととはこうすればいいんだ。要は計画をたてること。AのつぎにB。そしてC。そうすればDが手に入る。

それから彼らは、計画的行動というものに、いそしむようになりました。自分たちも楽園も、システムミミックな全体なのだ(15)という思いは、こうして楽園から追放されていったのです。

マクベス夫妻は、アダムとイヴの正統的な末裔である。彼らに最初の一押しを与えたものは、蛇の誘いであり、魔女たちの予言、つまりシニフィアンという言葉だ、ということは何を意味するのか。

マクベスの、魔女の予言に対する態度の変化を見よう。魔女の予言は二回にわたってなされるわけだが、これを便宜上三つに分けたい。「コーダーの領主」「王位」「バーナム、女の腹」という具合に。はじめの予言は、マクベスはただ坐して

受動的にその成就を待つ。

二番目の予言は、彼自ら手を下す。つまり与えられたシニフィアンを前にして能動的にシニフィエをつかみとるのだ。では最後の予言はどうか。マクベスは、最後の予言に基づいての何らかの行動を起こすわけではない。ただ、このシニフィアンに對置さるべきシニフィエを全く恣意的に作り出す。つまり、解釈する。魔女の予言に実は曖昧なところなどなく、みごとに彼女らはマクベスへの約束を果たすのである。ところが彼自身は、タイホイザーの絶望のように、予言を、「マクベスは滅びず」という意味の隱喩として受けとり、勝手に喜んでしまふのである。もともと、彼は安心を求めて魔女のもとへ赴いたのだから、「マクベスの不滅」なるシニフィエが初めから用意されていたのであって、彼はシニフィアンをどうとでも解釈して当て嵌めればよかったのだ。彼の、世界に対して能動的であるうという意志は、こうして、シニフィアンによってシニフィエを裏づけようという顛倒した意図に変じ、最後に「シニフィアンの優位」の前に敗れ去るのである。彼の、魔女への悪罵を原文で引いておこう。

... patten with us in a double sense;

That keep the word of promise to our ear,

And break it to our hope.

(V.8.20-22)



「問題は、言葉と自分と、どちらが主人かということ」だとチエシヤ猫が言う通り、マクベスが、「自分」が言葉の主人だと思ひこんだことにあるのだが、さて後半の対句構造もなかなか面白い。「耳に対して約束を守り、希望に対して約束を破った。」というのだ。耳のような具体物と希望のような抽象物が対になっている。この時点でマクベスは、自分の身体を自ら統御できないこと、つまり、精神（＝希望）が身体（＝耳）の主人ではないことに気づいている。だいいち彼は、耳の伝え聞いた、魔女の言葉の表面上の意味が、決して自分の安泰を保証していなかったことに、事ここに至るまで気づいていないではないか。ベイツスは、人間は明白なことに気づくのがたいへん苦手だというレインの指摘を引いて、それは人間が自己修正的なシステムであり、動揺を鎮めるために明白なことを押し隠してしまうからだという。マクベスの耳はたしかに予言の正確な意味を把握していながら、それは精神に伝達される過程でみごとに歪められており、彼の意識はこの操作に気づいていない。自分の身体さえ、意識によっては統御されえないものだということを、マクベスはここで初めて知る。そしてなにより、彼の行動は、能動的どころか、はじめの魔女の予言という外来的な刺激に対する反応の連鎖だったではないか。

「明治四十四年八月和歌山に於て述」というのだから『行人』を書き始める前年のことだが、「現代日本の開花」は頗る有名な講演である。<sup>(16)</sup>これは、一郎のみならず夏目金之助がまぎれもないマクベスであることを示す悲痛な講演だというほかない。骨子は極めて簡単に、

西洋の開化（即ち一般の開化）は内發的であつて、日本の現代の開化は外發的である。<sup>(17)</sup>

そして

開化の推移はどうしても内發的でなければ嘘だ。<sup>(18)</sup>

というのだが、嘘とは何であり、なぜ嘘ではいけないのか、という素朴な問いが、ここでは決して無意味ではない。ここで漱石は、「現代日本の開化は皮相上滑り」であり、「西洋で百年かかって漸く今日に發展した開化を日本人が十年に年期をつめて——遺りとげ」（傍点引用者）ねばならないのだから神経衰弱にならざるをえないという。<sup>(19)</sup>結論として、べつだん

名案はないけれども「出来るだけ神経衰弱に罹らない程度に於て、内發的に變化して行くが好からうといふやうな體裁の好いことを言ふよりほかに仕方がない。」<sup>(20)</sup>というのだ。

この結論はよくわからない。現実には外部からの刺激によつて「開化」せねばならぬと思つてゐる日本人が、これを「内發的」に行なうというのは、まさに、「眠る」ために「眠らう」としない「不眠症者や、魔女の予言に初動を与えられながら「能動的」たろうとするマクベス同様、己れの意識を欺くことによつてしかなしえないはずではないか。この講演で漱石は、まず「開化」一般の事情を説明したあと、日本の特殊事情を述べにかかるのだが、どうも私には、前半部の方が切れ味鋭く、これをそのまま敷衍すればよかつたものを、突然、西洋流開化、即ち近代を先驅的に是とする大前提がとびだしてしまつたために後半部が納得のいかないものになつてしまつたように思える。開化、一般について漱石は、開化には「消極的」なのと、積極的、なのとがありこの両者が複雑に入り混じつてゐるという。消極的、<sup>(21)</sup>というものは、何らかの社会的義務を果たすにあつて努力を節約するためになされるもの、つまり交通通信手段の進歩のごときものであり、積極的、とは、「道楽」であつて、「自から進んで強いられざるに自分の活力を消耗して嬉しがる方である」、「進んでは此精神が科學にもなり化學にもなり又哲學にもなる」<sup>(22)</sup>ものだといふ。この

両者の弁別こそ、ここでの議論の要をなすはずのものであるのに、後半で漱石は、話にまとまりをつけるためなのか、「コンガラガツ」<sup>(23)</sup>てゐる。という点のみ強調してゐる。実はこの、「道楽」文化、の「自發的活動を消耗する性格」こそ、漱石のいう「神経衰弱」のおおもとにあるものなのだ。

柄谷行人は、「魔女の予言を聞いて以来、マクベスはぼんやりしてゐる。」<sup>(24)</sup>という。たしかにこの辺りのマクベスは、一見した所、夫人がいうように、大事をなしとげる機会を与えられながらこれを躊躇し、氣弱になつてゐるようによさ見える。しかし柄谷が指摘する通り、「彼をこのように變化させたものは、彼の中にあつた野心ではなく、むしろ彼の中には無いもの、いかえれば彼の中には何も無いという發見にはかならない」のである。漱石のいう「道楽」つまり、彼が例として挙げる、釣りだの、碁だの、獺だの、更には學問も、畢竟マクベスにとつての王殺しに近いものがある。漱石は言つ、「元々社會があればこそ義務的の行動を餘儀なくされる人間も放り出して置けば何處迄も自我本位に立脚するのは當然だから自分の好いた刺戟に精神なり身體なりを消費しやうとするのは致し方ない仕儀である。」<sup>(25)</sup>果たしてこれは「當然」であらうか。つまり、あらゆる外界からの刺激や強制を取り去つた時、人間は〈内發的〉に、本當に自分のやりたい事をやり始めるだらうか。答えは間違いなく否だと思つけれども、依然として、自我の

實在を樂天的に信じる論者は後を断たない。<sup>(24)</sup> 繰り返すが、個人とはそのような孤立したシステムではありえない。釣りという道楽が、道楽としての価値、快樂としての価値すら全く認められない社会では、誰も釣りなどしないだろう。柄谷行人は、マクベスが、マクベス夫人という他者によって、自己の形のない理想を現実化されるという。つまりマクベスは、王位篡奪が、社会的に、抱く価値のある野望だということとを夫人によって確認する。〈内発的な開化〉などというありえぬものを夢想してしまった漱石は、こうして不眠症のマクベス——一郎になる。手段を積み重ねていけばいずれ目的に到着するだろうという思いなしは、〈消極的開化——義務〉をこなして、「びよい／＼と飛んで行」けばいずれ〈積極的開化——道楽〉に行きつくだろうという発想に通底する。<sup>(25)</sup> かれらが神経衰弱にかかるのは、かれらのしていることが〈外発的〉だからではなく、この思考構造、つまりいずれ〈本当にしたいこと——内発的開化〉が顕現するだろうという不可能な夢想に把えられているからである。〈自己〉や〈日本〉を、外界から孤立したユニットとして考える限り、このアポリアを免れえない。

ただしマクベスという男の恐ろしさは、こうした分析一切を受け入れてなお我々に反問しうるところにある。彼は、シニフィアンの連なりからなる世界の存在に気づいたあと、依

然、歩みやめめない。本当に、お前たちが、ないというものは、ないのか？と彼は問い返すことができるし、我々は答えられない。一郎もHさんとの問答の中で、マクベスに近づくと彼は明らかに苦しんでいるが、苦しんでいるが故に自分は間違っているとは考えない。「僕は絶対だ」と彼はいう。<sup>(26)</sup> しかもこれを論理的に駁すことは不可能だ。人間が無力である地点、何らかの超越者が現われる地点を悲劇の世界と呼ぶならば、この地点を拒絶し続けることによる一郎の苦悶は、まさに近代の袋小路であり悲劇の死である。しかし柄谷のいうようにこの拒絶自体が悲劇であるなら、近代こそ最大の悲劇だという逆説も成り立つ。

しかしここで問題にすべきは、〈内発的〉〈外発的〉という用語に見られる、自己と外部を截然と分かつ思考法の近代的特殊性であろう。パオロとフランチェスカの話に言及するとき、一郎は果たして「自然が醸した戀愛」によって勝利者となりたのか、「人間の作った夫婦といふ關係」に固執してゆきたいのか。「自然に従ふものは、一時の敗北者だけれども永久の勝利者だ」という言葉を『マクベス』にあてはめれば、まさしく、少なくとも劇中ではなんら能動的な行為を起こさないフリーアンスこそ、〈永久の勝利者〉に当たる。しかし、一郎やマクベスは、フリーアンスたるものが、永久の勝利者たるであると知りつつもフリーアンスとなることを肯じない男

たちだ。人間中心主義の正統的な実行者たち。たとえ敗北の道を辿ろうとも「植え付けられた」位置には甘んじられない者たち。ベイッソンは「ここ百年の間、意識をより無意識的な精神部分に根ざす諸々の修正プロセスから、切りはなそうとするような、特異な社会的現象が顕在化してきている。」<sup>(28)</sup>という。これを言いかえれば、我々の身体の内なる自然、我々を眠りに誘いこみ、我々を癒やすものを否定しようとする動きである。〈目的心〉即ち意識化された部分のみを、自己と考える近代人。ベイッソンはこの〈目的心〉を修正しようものとしていくつかの要素を挙げているが、まっさきに来るのは〈愛〉である。

マルティン・ブーバーは〈我と汝〉と〈我とそれ〉の関係を区分し、「人間同士でも、愛より目的が重要であるときには〈我とそれ〉の関係が現われる」ことを指摘した。パオロとフランチェスカの〈名が残っている〉ことをもってかれらを〈永遠の勝利者〉と規定する一郎には、かれらが〈勝利者〉となるために愛したのではないことが全くわかっていない。妻お通にもお貞さんにも、自分を幸福にするという目的心をもちて臨んでしまう一郎が、彼女らと〈我とそれ〉の関係をしかか持っていないこと、言うまでもない。「馬鹿になれない」とはこのとき、「愛の欠如」と同義なのである。

註

- (1) 『漱石全集 第五卷』(岩波書店、一九六六年)六四〇頁。
  - (2) 『マクベス』の引用は小田島雄志訳による。
  - (3) E.M.W. Tillyard, *Shakespeare's History Plays*. (London: Chatto & Windus, 1948.) P.317
  - (4) Maynars Mack, *Killing the King* (London: Yale Univ. Press, 1973.) P.155
  - (5) 漱石作品の登場人物にとってのシニフィアンの意味については、スミエ・ジョーンズ「対話の苦しみ——漱石の心理小説について」(『比較文学研究』57号)の示唆を受けた。
  - (6) 『漱石全集 第九卷』八頁。
  - (7) ウィルバー・サンタースがこの「やってしまうこと」の不可能性を論じている。Wilber Sanders "The 'Strong Pessimism' of *Macbeth*" in *The Dramatist and the Received Idea* (Cambridge Univ. Press, 1968.)
  - (8) L.C. Knights, "Some Contemporary Trends in Shakespearean Criticism" in *Some Shakespearean Themes* (London: Chatto & Windus, Ltd and Stanford Univ. Press, 1959)
  - (9) 参考のため、高松雄一氏の訳を掲げる。
- だから、ひとたび思惑を誤れば、利得を望んだために

かえって平常の生活を失ってしまうのだ。

野心という

この忌むしい病は、多くを持ちながら、

なお、飽きたりぬ思いを起こさせて、

人を苦しめる。

こうして、人はおのれが持つものをなおざりにし

思慮分別を欠くために、所有を増やそうとして、

幾許かの有を無に帰してしまうのがおちなのだ。

〔世界古典文学全集 シェイクスピアVI〕筑摩書房、一  
九六六年)

(10) 『第五巻』七〇八〜七〇九頁。

(11) Knights 前略論文。

(12) Knights, *Explorations*, 2nd ed. (London: Chatto & Windus, 1946.)

P.34

(13) G.Wilson Knight, "The Milk of Concord : Life-themes in  
'Macbeth', *The Imperial Theme* (London: Methuen & Co.Ltd,  
1965.)

(14) グレゴリー・ヘイトソン『精神の生態学(下)』(佐藤良明・  
高橋和久訳、思索社、一九八七年)所収、「目的心対自然」

(15) 同書、六二八頁。

(16) 『漱石全集 第十一巻』所収。

(17) 同、三三三頁。

(18) 三三八頁。

(19) 三四〇〜三四一頁。

(20) 三四三頁。

(21) 三二七頁。

(22) 柄谷行人「マクベス論——意味に憑かれた人間」(『新装版  
意味という病』河出書房新社、一九七九年)

(23) 『第十一巻』三二八頁。

(24) 例えば山崎正和『柔らかな個人主義の誕生』など、相当ソフ

イステイケートされた都市有閑階級しか眼中にないがごとくで  
ある。

(25) 『第十一巻』三三五頁。

(26) 『第五巻』七三八頁。

(27) 同、六〇一頁。

(28) ヘイトソン前掲書。六四二頁。